

「禍を転じて福となす！」

ー柴田先生を偲んでー

以前、『コロナ「禍」を「福」に変えた老年学』という題で書かせて頂きました。内容は、コロナと私の癌経験で大変だったが、会社の運営には、逆に役立つことが多かった（福となった）、というものでした。

今回、同タイトルですが、次の三つの内容になります。①柴田先生との思い出、②私の現在の体調、③私の考えるジェロントロジー、です。

①は3月の柴田先生を偲ぶ会に参加出来なかった事と、5期生の私と老年学との出会いは柴田・渡辺ゼミを抜きには語れない事からです。

①柴田先生が昨年12月お亡くなりになる10日程前、柴田先生から直接お電話を頂きました。「萩原さんに、理事を辞めたいと言ったそうじゃないか？ 具合はどうなんだ？ 俺だって体の調子が良いこともないが、やれるだけやろうと思っている。」と、私の身体もご心配して下さる内容でした。

私が修士論文としたのは、柴田先生の「あなたも歳だし、高齢者のセクシュアリティでもやってみたら」との一言からでした。2年生の夏、発表に向けて何故だったか思い出せませんが、堀内さん、留学生のヤンちゃんと私の三人が特訓(?)を受けました。ヤンちゃんは日本語の発音まで厳しく何度も注意される。堀内さんは何回目かの練習の後、気を失った(?)。事務の松原さんに救急車を頼みに行ったら、「大丈夫！柴田先生はお医者様だから。」の一言。ゼミではいつも中辻さんの堂々として且つ丁寧な質問に柴田先生が嬉しそうにお答えになっているのが印象的でした。又、合格祝いで乾杯後の柴田先生の「シューベルト」と渡辺先生の「与作」は未だに耳から離れません。卒業式後の宴会を任された私は、場所を築地の本願寺とし、そこで最後に先生方も一緒に僕らはきっと待ってる君とまた会える日々を、、>と、森山直太朗の「さくら」を合唱しました。これが、私の修士時代、常に我々に歩調を合わせて引っ張って下さった先生方との思い出です。

②2022年6月の胃全摘から3年近くになるのに、未だに抗がん剤の副作用による、手の指先の痺れ、足裏の違和感による杖歩行、運動不足と悪循環が続いています。手術後、新会社を立上げ経営計画発表会を開催した際、柴田先生からメッセージが届きました。「御園君も、私が提唱する学際的老年学の目指すプロダクティブエイジングをまさに実践しております。プロダクティブエイジングとは一言でいえば、有償無償に関わらず社会貢献、社会のために何かをすることです。QOL（生活の質）は聞いたことが有るかもしれませんが、その一歩先と考えていただければよいかと思います。」とのお祝いと励ましのお言葉でした。

胃全摘手術のご担当の先生には、もう検査や手術はしたくない（一年で6回入退院した

恐怖から）と言っていた事もあり、今年 3 月には緩和ケア外来を受診するよう勧められました。緩和の先生からは突然「余命三ヶ月・・・」と言われたのですが、それがどういうことなのか自分でも良く分かりませんでした。4 月半ば妻と妹に懇願され、手術をしてもらったのと違う病院で改めて検査してもらうことにしました。呼吸が少し苦しくなってきたこともあります。前の病院の緩和ケア外来が自宅に酸素発生器を発注してくれ、もし胸が痛くなったらこれを飲みなさいと医療用麻薬を渡されました。そうこうしている時、柴田先生のご逝去を聞き、私の考えが変わりました。0.1%の可能性にチャレンジしようと思ったのです。

新しい病院での初診が 4 月 30 日、5 月 2 日の検査、6 日からの検査入院、9 日手術（肺がんの一種で気管支癌）、10 日退院。9 日の手術は気管支内壁にある腫瘍を除去するので体の外傷はありません。手術は 4 時間位かかると聞いていましたが、2 時間程で終わりました。それ迄右肺が使えなくなっていたのが開通した（6～7 割除去）ようで、不思議な位に呼吸が楽になり、苦しかったのが夢だったのか、それとも楽な今が夢か？分からない状態と言えます。9 日午前の検査の結果に問題がなければ、午後に退院もできるとの事。そして、退院から今日で丁度 10 日。呼吸は問題ないし、気分は爽快です。

この事が「禍が転じて福となった」と言えるか分かりませんが、私は、一度失った命を取り戻したようです。

③柴田先生の言われる応用老年学の学際的な面に、「老年哲学」もまた含まれます。柴田先生は医者である前に「哲学者＝生き方を示す人」であったと思います。そして、私たちに死に方ではなく、まさにご自分を通して生き方を示して下さいました。

応用老年学会英語版で先生は、『我々の目標(aim)』は幸福の増大や社会への貢献を伴う商業的な成功が結びつくプログラム開発や、ネットワークセンターとしてリーダーシップを発揮すること。又、高齢化する個人と社会との関わり、そこで生ずる様々な問題に対処すること、が期待されていると述べておられます。

実は、千名以上のオペレーターを擁してテレマーケティングをしているベルテックという会社の会長に初めてお会いした際、ジェロントロジーを取り入れ、他社との差別化を図りませんか、とお話しました。すると、「そういう事なら、わが社の全員に老年学を勉強させ検定試験を受けさせます。」と即答下さいました。

今現在、AI 時代、そして超高齢社会において、世の中が、人口の約三分の一を占める高齢者の取り合いをしているように見えます。どのチャンネルを回しても、「老いないように！」のコマーシャルばかりです。しかし、こんな今だからこそ、本当の人間の生き方、人間同士の接し方を学ぶ必要があるのではないのでしょうか。それを学べるのがジェロントロジーで、私も、これから多くの高齢者、そして特に若い世代にジェロントロジーを伝えたいと考えています。

以上